

松 山 大 学 論 集
第 33 卷 第 1 号 抜 刷
2 0 2 1 年 4 月 発 行

評伝 入江奨先生の人と学問（その6）

—— ある経済学史研究者の真摯な人生 ——

川 東 淸 弘

評伝 入江奨先生の人と学問（その6）

—— ある経済学史研究者の真摯な人生 ——

川 東 埴 弘

目 次

はじめに

第一章 生誕から松山商科大学就任まで

（1923年6月～1951年3月）

第二章 松山商科大学教員時代

第1節 松山商科大学一教員時代

（1951年3月～1973年3月）

1) 1951（昭和26）年度

～

3) 1953（昭和28）年度（以上、その1、第32巻第2号）

4) 1954（昭和29）年度

～

13) 1963（昭和38）年度（以上、その2、第32巻第3号）

～

22) 1972（昭和47）年度（以上、その3、第32巻第4号）

第2節 経済学部部長・大学院経済学研究科長時代

（1973年4月～1984年3月）

1) 1973（昭和48）年度

2) 1974（昭和49）年度（以上、その4、第32巻第5号）

3) 1975（昭和50）年度

～

7) 1979（昭和54）年度（以上、その5、第32巻第6号）

8) 1980（昭和55）年度

9) 1981（昭和56）年度

10) 1982（昭和57）年度

11) 1983（昭和58）年度

第3節 再び教授に戻って（1984年4月～1989年3月）

- 1) 1984 (昭和 59) 年度
- 2) 1985 (昭和 60) 年度
- 3) 1986 (昭和 61) 年度
- 4) 1987 (昭和 62) 年度
- 5) 1988 (昭和 63) 年度 (以上, 本号)

第4節 再雇用期の入江先生 (1989年4月～1994年3月)

第三章 退職後の入江先生 (1994年4月～2005年4月)

おわりに

8) 1980 (昭和 55) 年度

研究科長3年目。

入江先生赴任30年目、大学院経済学研究科長3年目、56歳～57歳にかけての時期である。大学院の運営委員は本年度も伊達功と望月清人が補佐した。また、学校法人の評議員を続けている。

学長は稲生晴 (1年目)、経済学部長は望月清人が続けている¹⁾

4月5日、午前10時より入学式が体育館にて举行され、経済学部は500名、経済学研究科修士課程は3名が入学した。そのうち1人は入江ゼミ出身で、大学院も入江先生を指導教授とした²⁾

本年度、経済学部新しい教員が採用され、川東埤弘 (日本経済論, 農業経済論)、河野良太 (経済原論Ⅲ) が講師として採用された³⁾

本年度の入江先生の担当科目は、経済原論Ⅰ-1 (2単位)、一般演習 (2単位)、経済学史 (4単位)、ゼミ1, 2 (各4単位)、短大の経済学Ⅰ (2単位)、そして大学院の経済学史であった。大学院では修士課程1年の片岡孝暢と博士課程4年の渡辺利文を指導している。

経済原論Ⅰ-1 (2単位) の講義は前年と同様、岩林彪との共同講義で、マルクス経済学の基礎原理についての講義 (マルクス経済学の方法論, 商品分析

1) 『六十年史 (資料編)』126～131頁。

2) 『学内月報』第41号では経済学修士4名、経営学修士3名となっているが、間違い。『六十年史 (資料編)』161頁では、経済学修士3名、経営学修士4名となっている。

3) 『学内月報』第40号, 1980年4月1日。

論、剰余価値生産の法則、資本の蓄積過程、資本の流過程、資本制生産の総過程）であった。テキストは入江奨『経済学ノート』を使用した。

経済学史の講義も前年とほぼ同様、経済学の生成（重商主義、重農主義）、古典学派の形成・展開（スミス・リカードウ・マルサス）、古典学派解体（ミル）、国民主義経済学の形成、マルクス経済学、限界分析台頭（ジェボンズ、メンガー、ワルラス、マーシャル）の順序で講義する予定で、テキストは入江奨『経済学史ノート』を使用した⁴⁾

今年のゼミ1に、14名（男子11名、女子3名）が入った。4月3～5日に宇和島市住吉南予青年の家でゼミ1、2合同のゼミ合宿を行ない、テキストは有斐閣新書の『ミクロ経済学入門』を使用した。ゼミ1のテキストはジョン・スチュアート・ミルの『経済学原理』（末永茂喜訳）を使用した。ゼミ形態は質問班①、報告班①、討論班②の4班にわけて行なっている。それまで、入江先生は原書を読んでいたが、本年から翻訳本にかわっているようである。サブゼミは本年も続けている⁵⁾

ゼミ2のテキストは引き続き、マーシャル『経済学原理』（原書）を読んでいる⁶⁾

また、入江先生はゼミ連顧問を続けている。

入江先生は『つくし』第12号（1980年4月1日）に、「OB諸氏への語りかけ」と題し、ゼミ指導の悩みについて、大要次のように述べている。

「マル経班とか近経班とか古典班とか現状分析班とかつくって指導してきたのですがゼミ応募に関してはマイナス効果を発揮しているようです。さらに入江ゼミから学史のイメージが除去されるころまでになっている。それは、1年の講義のマルクス経済学のイメージが強烈であるかも知

4) 『1980年教授要目』

5) 「1部ゼミ活動状況」『つくし』第13号、1981年4月1日。

6) 『1980年教授要目』

れない。数少ない応募者の中に学史を勉強したいというのは殆どいません。

しかし、ぼくは学史を本業にしています。昭和55年度からはこのことに徹し、新1部生には研究することを求め、在学中は研究者になることを求めることにしました。

ふまれても、ふみにじられてもつみとられても、どんなにいじめられても必ず芽をだしてくるのが“つくし”です。“つくし”はロマンのシンボルではなくて、不撓不屈、不死鳥のシンボルです。それを孤独のシンボルだけにはしないようにしませんか⁷⁾

大学院で授業を受けた入江指導生の片岡孝暢（1980年4月修士1年）は、後に入江先生への思い出として、「経済学者の理論や歴史を正確・忠実に原典から読み取り理解することの大切さを教えて戴きました」と回顧している⁸⁾

入江先生は『大学院経済学研究科 昭和55年度の概況』について『温山会報』第23号（1980年11月）に報告し、大学院の悩みを、大要次のように述べている。

「経済学研究科の動向について、大学院学生の動向はあまり顕著な前進が見られず、残念です。

教員の動向について、経済学研究科の設置に当たって功労者である長老の先生方とお別れすることになりました。しかし、昭和55年度からは宮崎満（交通政策）、田辺勝也（社会政策＝社会保障論）の諸教授が演習担当者になり、また、昭和56年度から岩橋勝（日本経済史）、梶原正男（国際経済論）の諸教授が演習担当者となることになっています。教員に関する限り新陳代謝・充実の歩みが刻一刻と前進していると、胸を張って言うこ

7) 入江奨「OB 諸氏への語りかけ」『つくし』第12号（1980年4月1日）、4～5頁。

8) 片岡孝暢「入江先生からの学びと思い出」『つくし』第29号、2006年1月、35頁。

とができます。

問題は学生の量的動向です。昭和55年度に修士課程を修了したものは2名、4月に修士課程に入学したものは3名です。修士3・4年次在学者が各1名、同2年次在学者が2名、博士課程在学者が2名、計、経済学研究科9名。ところが定員は、修士10名、10名、博士4名、4名、4名、計32名です。

昭和55年4月修士入学者が3名ありましたので、責任者としては一安心しましたが、それほど、入学者を得ることは困難です。学費が通常の家計の負担を超えていること、進路が極めて不安定なことが最大の理由です。博士後期課程についてはさらに深刻です。これが私の最大の悩みです⁹⁾

このように、教員の新陳代謝・充実の半面、大学院生入学者の少ないこと、オーバーマスター、オーバードクターの学費問題、進路問題などが大問題で心を痛めていたことがわかる。

9月16日、大学院（修士）の入試（9月期）が行なわれた。修士課程の志願者はいなかった¹⁰⁾

11月20日、学校法人松山商科大学評議員任期満了（11月末）に伴う選挙が行なわれ、入江先生はまた再任された¹¹⁾

11月20日、稲生理事長ら大学当局は文部省に「大学院経営学研究科博士課程設置協議書」を提出している。

本年度第27回全日ゼミが開かれているが、その詳細は不明である¹²⁾

12月13、14日の両日、第20回中国四国学生政経ゼミナール大会が松山商科大学にて開催された。入江ゼミでは、古典班が「リカード機械論」を報告し

9) 『温山会報』第23号、1980年11月。

10) 『学内月報』第46号、1980年10月1日。『松山商科大学一覧』1980年度。

11) 『学内月報』第48号、1980年12月1日。

12) 入江奨「学生の自主的研究活動の動向の一齣」『六十年史（写真編）』247～250頁。

ている¹³⁾

1981(昭和56)年1月26日、本館(新本館)の落成式が新本館の6階ホールで行なわれている¹⁴⁾

2月11～13日にかけて、1981年度の入試が行なわれた。入試日程はこれまでと大きく変更され、経済学部が2月10日、経営学部が2月11日、人文学部が2月12日とした。経済学部の募集人員は350名、経済学部の志願者は3,157名であった。合格発表は2月23日で、経済学部は1,131名を発表した¹⁵⁾

入江先生は1981年度の入試出張に岡山に出張し、試験場長を務めている¹⁶⁾ 入江先生は宿所で入試問題、答案用紙から片時も眼をはなさなかったという。入江先生の責任感の強さが窺われるエピソードである。

2月18日、望月清人経済学部長の任期満了に伴う経済学部長選挙が行なわれ、新しく高橋久弥教授(50歳)が選出された¹⁷⁾

3月20日、午前10時より第30回卒業式が体育館にて挙行され、経済学部は447名が卒業、経済学研究科修士課程は4名が修了した¹⁸⁾ 入江ゼミでは18名が卒業した。

この年に入江ゼミを卒業した学生の卒業論文が『つくし』第13号(1981年4月1日)に載っている。それは次の如くである。「ケインズ雇用理論の意義」「マルクス疎外論の形成」「リカード価値論－交換価値と絶対価値について－」「経済学・哲学草稿における疎外」「スタグフレーションに対する諸説の検討」

13) 古典班「中四ゼミナール大会回想記」『つくし』第13号、1981年4月1日、36～46頁。

14) 『学内月報』第50号、1981年2月1日。『六十年史(資料編)』の年表。『松山商科大学一覽』1980年度、159頁。

15) 松山商科大学『昭和56年度入学試験要項』、『学内月報』第50号、1981年2月1日。『学内月報』第51号、1981年3月1日。なお、この年は各学部とも補欠を出し、経済学部1,177名、経営学部1,118名、人文英語260名、人文社会340名の合格者となった(『学内月報』第52号、1981年4月1日。『六十年史(資料編)』174頁、『松山商科大学一覽』1980年度、8、9頁)。

16) 『松山商科大学一覽』1980年度、17頁。

17) 『学内月報』第51号、1981年3月。

18) 『学内月報』第52号、1981年4月。『六十年史(資料編)』141、161頁。『松山商科大学一覽』1980年度、19頁。卒業生数は1980年10月卒業を含む。

「国富論－第四編－におけるスミスによる重商主義批判の研究」「マルサスの人口論に対する考察」「利潤率の傾向的低下の法則について」「非自発的失業についての一考察」「資本論における貧困化理論とそれをめぐる論争についての一研究」「労働過程および生産過程における剰余価値の生産」「ガルブレイスの大企業体制について」「労働の疎外」「絶対的剰余価値の生産について」等々。

3月23日、経済学研究科（修士・博士）の入試（3月期）が行なわれ、修士課程は4名が受験し、3名が合格した。博士課程の受験者はいなかった¹⁹⁾

3月26日、文部省より経営学研究科博士課程設置認可がおりている²⁰⁾

9) 1981（昭和56）年度

研究科長4年目。

入江先生赴任31年目、経済学研究科長4年目、57歳～58歳にかけての時期である。大学院の運営委員は本年度も伊達功と望月清人が補佐した。また、学校法人の評議員を続けている。

学長は稲生晴が続けた（2年目）。経済学部長は新しく高橋久弥が就任した（1981年4月1日～1983年3月31日）¹⁾

本年度から学期制が変更された。入学式は4月1日、前期試験は7月末に行ない、夏休暇は8月から9月20日まで、それから後期が始まることになった。

4月1日、入学式が行なわれ、経済学部は445名、経済学研究科修士課程は3名が入学した²⁾。そのうちの一人は入江先生を指導教授とした。

本年度、経済学部に新しい教員が採用され、清野良栄（経済原論Ⅱ）、館野

19) 『六十年史（資料編）』161頁。なお、経営は9月期と3月期をあわせた人数。『松山商科大学一覽』1980年度。

20) 『六十年史（資料編）』

1) 『六十年史（資料編）』126～131頁。『学内報』（従来の『学内月報』の改題）第52号、1981年4月。

2) 『学内報』第53号、1981年5月。なお、『六十年史（資料編）』161、174頁、『松山商科大学一覽』1980年度では、経済学部が442名、経営各々が468名、人英が101名、人社が125名。それは後者は5月1日の在籍者のためだろう。

日出男（ドイツ語）が講師として採用された。

本年カリキュラムが改革され、経済原論のⅠ（4単位）とⅡ（4単位）がマルクス経済学の入門編と上級編、経済原論のⅢ（4単位）とⅣ（4単位）が近代経済学の入門編と上級編になった。経済原論のⅠ（4単位）は2クラスで入江先生と岩林彪が担当した。

本年度の入江先生の担当科目は、経済原論Ⅰ（4単位）、一般演習（2単位）、経済学史（4単位）、ゼミ1、2（各4単位）、短大の経済学Ⅰ（2単位）であった。また、大学院で経済学史を担当し、修士課程と博士課程ではそれぞれ大学院生を指導している。

経済原論Ⅰの講義は、前年と変わらず、(1)マルクス経済学の方法論、(2)資本論の解説、(3)現代資本主義への分析への接点を行なうもので、テキストは入江奨『経済学ノート』（プリント）を使用した。

経済学史の講義も、前年とほぼ同様で、古典派以前、古典派形成期、古典派発展期、古典派解体期、経済学の再編成期＝階級的分化期にわけて講義を行なうもので、テキストは入江奨『経済学史ノート』を使用した³⁾

また、入江先生はゼミ連顧問を続けている。

今年のゼミ1は、7名と少なく、各班に分かれず、全員一団となって、J・S・ミルの『経済学原理』を輪読している。そして、そのゼミ活動として、4月に新歓コンパ、9月に大洲青年の家にてゼミ合宿、11月にインゼミ（福岡大学）、12月に中四ゼミナール大会（広島経済大学）にむけて取り組み、発表している⁴⁾。ゼミ2のテキストは前年に引き続き、J・S・ミルの『経済学原理』（翻訳）であった⁵⁾。

入江先生は1981（昭和56）年度の『大学院経済学研究科の現況』について、相変わらず大学院生の入学者が少ないことの悩みを、『温山会報』第24号（1981

3) 『1981年教授要目』

4) 「1部ゼミ活動報告」『つくし』第14号、1982年4月1日、22～23頁。

5) 『1981年教授要目』

年11月)に記している。

「本年三月に四名の修了者をだし、本年四月に三名の修士課程入学者を受け入れ、本年度の修士課程在学者は第二年次生の三名と第一年次生の三名の合計六名です。博士課程在学者は二名、うち一名は五年次生で博士論文提出資格認定試験合格者、他の一名は第四年次生です。従って新入学者はすでに三年間ゼロです。入学者、在籍者がいかに少ないか、経済学研究科が直面している最大の問題点はこのことです。

研究科の学生をふやす方途を追求しなければなりません、研究科への進学者が少ないのは研究意欲が乏しいからではなく、経済的負担問題と進路不安の問題です。この点について施す術がありません。残るのは再教育機関としての役割です。温山会の熱意ある声を期待しています」⁶⁾

9月20日、大学院の9月期入試（修士課程）が行なわれた。経済学研究科は合格者ゼロ、経営学研究科は4名の合格者を出した⁷⁾

本年度も、第14回学内ゼミ、第21回中四ゼミ、第28回インゼミが開かれている。入江ゼミの学内ゼミ大会は不明であるが、11月21～23日の福岡大学におけるインゼミでは、「アダム・スミスの『国富論』における資本蓄積論の展開」を報告し、また、12月12～13日の広島経済大における中四大会は「スミスとケインズの比較研究」を報告している⁸⁾

1982（昭和57）年1月28日から30日まで、入江先生は大洲青年の家で、新1部生（1982年度のゼミ入学）12名を迎え、新2部生（1982年度）とともに合宿を行なっている⁹⁾

6) 『温山会報』第24号、1981年11月。

7) 『学内報』第58号、1981年10月1日。

8) 『つくし』第14号、1982年4月1日、21頁。入江奨「学生の自主的研究活動の動向の一齣」『六十年史（写真編）』247～250頁。

また、入江先生は、『つくし』第14号（1982年4月1日）の巻頭言で、「三十年かけて確実につかんだことが極めて乏しいことに半ばアワテながら、マルクスを通して『古典派経済学』を学びなおすことが、今の私の仕事になっています」と言い、昨年4月からシスモンディに取り組んでいる、と記している¹⁰⁾

2月9～11日にかけて、1982年度の入試が行なわれた。2月9日が経済学部、2月10日が経営学部、2月11日が人文学部であった。経済学部の募集人員は350名、経済学部の志願者は2,919名であった。合格発表は2月20日。経済学部は1,107名を発表した¹¹⁾

3月20日、午前10時より本学体育館にて第31回卒業式が行なわれ、経済学部は397名が卒業、経済学研究科修士課程は1名が修了した¹²⁾ 入江ゼミでは、13名が卒業した。

3月23日、大学院（修士・博士）の入試が行なわれ、経済学研究科修士課程は9名が受験し、3名が合格した¹³⁾

10) 1982（昭和57）年度

研究科長5年目。

入江先生赴任32年目、経済学研究科長5年目、58歳～59歳にかけての時期である。大学院の運営委員は本年度も伊達功と望月清人が補佐した。また、学校法人の評議員を続けている。

学長は稲生晴が続け（3年目）、経済学部長も高橋久弥が引き続き務めた¹⁾

9) 入江奨「一九八二年二月の私」『つくし』第14号、1982年4月1日、5頁。「1部ゼミ活動状況」『つくし』第14号、1982年4月1日、22頁。

10) 入江奨「一九八二年二月の私」『つくし』第14号、1982年4月1日、5頁。

11) 『学内報』第61号、1982年1月1日。『学内報』第62号、1982年2月1日。『学内報』第63号、1982年3月。『学内報』第64号、1982年4月1日。『松山商科大学学園報』第54号、1982年3月1日。増田豊「(昭和57年度)入試状況」『温山会報』第25号、1982年11月。

12) 『学内報』第64号、1982年4月1日。なお、『六十年史（資料編）』141頁は前期卒業者を含み、経済学部402名、経営学部450名、人文英語60名、人文社会79名。

13) 『六十年史（資料編）』161頁。受験者、合格者は1次、2次の合計。

4月1日、午前10時より本学体育館にて入学式が挙行され、経済学部は452名、経済学研究科修士課程は3名が入学した²⁾

本年度、経済学部に新しい教員が採用され、増野仁（中国語）、間宮賢一（価格理論）が講師として採用された。

本年度の入江先生の担当科目は、経済原論Ⅰ（4単位）、一般演習（2単位）、経済学史（4単位）、ゼミ1、2（各4単位）、短大の経済学Ⅰ（2単位）であった。大学院は経済学史で、修士課程と博士課程の大学院生を指導している。

経済原論Ⅰ（4単位）の講義内容は前年と同様で、テキストは入江奨『経済学ノート』を使用した。

経済学史の講義内容は、前年度より古代・中世から始め、「(1)経済の自主性についての意識の形成（古代、中世）、(2)重商主義的論議の初期のすがた、その展開について、(3)自由主義的論議の抬頭、(4)再生産過程自覚の始まり、(5)再生産過程の商品論的把握の始まり、(6)古典派経済学の成立、(7)古典派経済学の発展と内部矛盾の抬頭（ケインズ経済学への論究）、(8)経済学の階級的国民分化と諸原型の形成－マルクス経済学の形成および均衡論的経済学の形成－」の順序で行ない、テキストは入江奨『経済学史ノート』を使用した³⁾

今年のゼミ1のテキストはマルサスの『人口論』、『穀物条例』、『経済学原理』（翻訳書）であった。

ゼミ2のテキストは、前年度に引き続きミルの『経済学原理』（翻訳）であった⁴⁾

また、入江先生は、ゼミ連顧問を続けている。

9月25日、大学院入試（修士課程）の9月期入試が行なわれ、経済学研究科は志願者4名、受験者3名、合格者3名であった⁵⁾

1) 『学内報』第64号、1982年4月1日。『六十年史（資料編）』126～131頁。

2) 『学内報』第65号、1982年5月1日。『六十年史（資料編）』161、174頁。

3) 『1982年教授要目』

4) 『1982年教授要目』

5) 『学内報』第70号、1982年10月1日。

11月5日、稲生学長は来年が本学創立60周年にあたるので、委員会を開き、①記念式典(11月5日)、②教育研究充実基金の募金(1億円を目標とする。温山会5,000万円、大学関係5,000万円)、③大学の構想、計画について(校名変更、施設計画、学部編制など将来構想)、④学術、研究調査(60周年記念論文、地域調査)、⑤年史編纂(年表整理、史料・写真収集、60年史の編纂)などの5つの事業を計画し、実行することにした⁶⁾。

11月14日、入試委員会で検討されていた推薦入学試験がはじめて実施された。選考方法は一般公募ではなく、指定校制度を採用した。推薦入学の定員は経済学部約90名、経営学部約100名、人文学部英語英米文学科約20名、社会学科約30名であった。推薦入試の志願者数、合格者数は次の通りであった⁷⁾。

	募集定員	志願者数	合格者数
経済学部	約90名	100名	99名
経営学部	約100名	96名	94名
人文英語	約20名	23名	23名
人文社会	約30名	40名	40名

1982(昭和57)年12月末で稲生晴学長の3年の任期が満了するので、11月6日の推薦委員会で稲生教授1人が推薦され、11月17日に稲生教授の信任投票となり、稲生教授が過半数をえて再選された⁸⁾。

本年度も学生の自主的研究活動の発表の場である、第29回全日ゼミ(12月20、21日、関東学院大学)、第22回中四ゼミ(12月11、12日、香川大学)、

6) 『学内報』第72号、1982年12月1日。『学園報』第57号、1982年12月10日。

7) 『学内報』第65号、1982年5月1日。『学園報』第56号、1982年8月1日。『学園報』第57号、1982年12月10日。『学内報』第72号、1982年12月1日。『六十年史(資料編)』174頁。

8) 『学内報』第71号、1982年11月1日。『学内報』第72号、1982年12月1日。『学園報』第57号、1982年12月10日。

第15回学内ゼミが開かれた。入江ゼミも取り組んだと思われるが、その詳細は不明である⁹⁾

1983年2月9～11日、1983年度の入試（一般入試）が行なわれた。経済学部が2月9日、経営学部が2月10日、人文学部が2月11日であった。経済学部の募集人員は350名（推薦を含む）。経済学部の一般入試の志願者は2,671名であった。合格発表は2月18日で、経済学部は922名を発表した¹⁰⁾

2月15日、高橋久弥経済学部長の任期満了に伴う経済学部長選挙が行なわれ、田辺勝也教授（51歳）が選出された¹¹⁾

3月19日、本学体育館にて第32回卒業式が挙行され、経済学部は354名が卒業、大学院経済学研究科は修士3名が修了した¹²⁾ 入江ゼミでは7名が卒業した。

3月22日、大学院経済学研究科（修士・博士）の入試（第2次）が行なわれ、経済は修士課程3名が受験し、2名（1人女性）が合格した。博士課程は1名が受験し、1名が合格した¹³⁾

11) 1983（昭和58）年度

研究科長6年目。

入江先生赴任33年目、経済学研究科長6年目、59歳～60歳にかけての時期である。大学院の運営委員は本年度も伊達功と望月清人が補佐した。また、学校法人の評議員を続けている。

9) 入江奨「学生の自主的研究活動の動向の一齣」『六十年史（写真編）』247～250頁。松山大学経済学部清野ゼミナール「AD2001」では、清野ゼミは毎年インゼミ、中四ゼミに参加した。

10) 『学内報』第73号、1983年1月1日。『学内報』第75号、1983年3月1日。『学園報』第56号、1982年12月10日。同57号、1982年12月10日、同58号、1983年3月1日。同59号、1983年4月1日。『六十年史（資料編）』174頁。

11) 『学内報』第75号、1983年3月1日。『学園報』第58号、1983年3月1日。

12) 『学内報』第76号、1983年4月1日。なお、『六十年史（資料編）』141頁では前期卒業を含み、経済学部359名、経営学部391名、人文学部英語96名、社会171名が卒業した。

13) 『学内報』第76号、1983年4月。『六十年史（資料編）』161頁。

学長は稲生晴が続け（4年目）、経済学部長は田辺勝也が新しく就任した（1983年4月1日～1985年3月31日）¹⁾

4月1日、午前10時より本学体育館において入学式が行なわれ、経済学部は443名、経済学研究科修士課程は2名、博士課程は1名が入学した²⁾

本年度、経済学部新しい教員が採用され、光藤昇（統計学）が講師として採用された。

本年度の入江先生の担当科目は、前年と同様、経済原論Ⅰ（4単位）、経済学史（4単位）、一般演習（2単位）、ゼミ1、2（各4単位）、短大の経済学Ⅰ（2単位）であった。大学院は経済学史を担当し、博士課程で大学院生を指導している。

経済原論Ⅰの講義は前年とほぼ同様で、教科書として入江奨『昭和58年度経済学ノート』を使用した。

経済学史の講義も前年とほぼ同様だが、重商主義期から始めている。テキストは『昭和58年度経済学史ノート』を使用した³⁾

今年のゼミ1のテキストはリカードウの『経済学および課税の原理』を原書で読んでいる。

ゼミ2のテキストは資本論の第1部、第7編、そして、第3部を国民文庫版（翻訳）で読んでいる⁴⁾

また、入江先生はゼミ連顧問を続けている。

9月24日、大学院入試（修士課程、9月期）が行なわれ、3名が受験し、3名が合格した⁵⁾

11月5日、午前10時から本館6階ホールにて、60周年記念式典が挙行され

1) 『学内報』第76号、1983年4月。『六十年史（資料編）』126～131頁。

2) 『学園報』第59号、1983年4月1日。『学内報』第77号、1983年5月1日。『六十年史（資料編）』161、174頁。

3) 『1983年教授要目』

4) 『1983年教授要目』

5) 『学内報』第82号、1983年10月。

た。稲生学長は式辞において、本学が幾多の艱難を乗り越え、60年の歴史を刻んだことに感謝し、今後、教員、施設の充実、現実に適応した教育方式の開発、研究機能の強化、開かれた大学づくり、国際交流の拡大等々に努めたいと抱負を表明している⁶⁾

11月20日、1984（昭和59）年度の推薦入試が行なわれ、経済学部 of 募集人員は約90名で、11月28日に合格発表があり、経済学部106名の合格者を発表した⁷⁾

本年も学生の自主的研究活動の発表の場である、第30回全日ゼミ（11月21～23日、東北学院大）、第23回中四ゼミ（日時、開催校大学不明）、学内ゼミが開かれたが、入江ゼミの参加状況は不明である⁸⁾

11月24日、学校法人松山商科大学評議員の任期満了（11月末）に伴う評議員選挙が行なわれ、入江先生はまた再任された⁹⁾

そして、12月1日の評議員会で新しい理事として山口卓志（新）が中川公一郎（再任）、高沢貞三（新）とともに選出された¹⁰⁾ 山口卓志は入江奨先生の弟子で、入江先生の代わりに理事になったと言われている。この時43歳であった。

1984（昭和59）年2月10～12日、1984年度の一般入試が行なわれ、10日に人文学部、11日に経済学部、12日に経営学部であった。経済学部の募集人員は350名（推薦を含む）、経済学部の志願者は2,373名であった。合格発表は2月21日。経済学部は957名を発表した¹¹⁾

3月1日、入江先生の大学院経済学研究科長の任期満了に伴う研究科長選挙

6) 『学内報』第84号、1983年12月1日。『学園報』第61号、1983年12月15日。

7) 『学内報』第70号、1983年7月1日。『学園報』第60号、1983年7月20日。『学内報』第84号、1983年12月1日。『学園報』第61号、1983年12月15日。

8) 松山大学経済学部清野ゼミナール「AD2001」。

9) 『学内報』第84号、1983年12月1日。

10) 『学園報』第61号、1983年12月15日。『学内報』第85号、1984年1月1日。

11) 『学内報』第79号、1983年7月1日。『学園報』第60号、1983年7月20日。『学内報』第83号、1983年11月。『学内報』第87号、1984年3月。『学内報』第88号、1984年4月。

が行なわれ、新しく伊達功教授（59歳）が選ばれた¹²⁾

3月19日、第33回卒業式が挙行され、経済学部は422名が卒業、経済学研究科修士課程は3名が修了した¹³⁾ 入江ゼミは11名が卒業した。

3月23日、大学院の入試が行なわれ、経済学研究科修士課程は2名が受験し、合格者はゼロであった。博士課程もなかった¹⁴⁾

3月31日、入江先生は3期6年にわたる経済学研究科長職を退任した。

第3節 再び教授に戻って（1984年4月～1989年3月）

1) 1984（昭和59）年度

入江先生赴任34年目、60歳～61歳にかけての時期である。

4月1日、入江先生は4年間にわたる学部長、そして6年間にわたる大学院経済学研究科長を退任し、一教授に戻った。入江先生は大学院研究科長を退いたものの、運営委員に就任し、新しく研究科長に就任した伊達功（1984年4月1日～1990年3月31日）を望月清人とともに補佐した。また、本年も入江先生は学校法人の評議員を続けた。

学長は、稲生晴が続け（5年目）、経済学部長は田辺勝也が引き続き務めている¹⁾

4月2日、午前10時より本学体育館にて入学式が挙行され、経済学部は468名、経済学研究科修士課程は3名が入学した²⁾

本年度、経済学部では川崎典子（英語）が講師として採用されている³⁾

本年度の入江先生の担当科目は、前年と同様、経済原論Ⅰ（4単位）、一般

12) 『学内報』第88号、1984年4月1日。

13) 『学内報』第88号、1984年4月1日。『学園報』第63号、1984年4月1日。なお、10月卒業を含むと、経済学部426名、経営学部417名、人文学部英語84名、社会114名が卒業。

14) 『学内報』第88号、1984年4月1日。

1) 『学内報』第88号、1984年4月1日。『六十年史（資料編）』126～131頁。

2) 『学内報』第89号、1984年5月1日。

3) 『学内報』第88号、1984年4月1日。

演習（2単位）、経済学史（4単位）、ゼミ1、2（各4単位）、短大の経済学Ⅰ（2単位）。そして、大学院は経済学史で、博士課程の大学院生を指導している。

経済原論Ⅰは3クラス体制をとり、高橋久弥、岩林彪も担当した。入江先生の講義内容は前年とほぼ同様で、マルクス経済学の方法論、資本論の解説等であった。そして教科書は入江奨『昭和59年度経済学講義』（自販）を使用した。

経済学史の講義も、前年とほぼ同様で、重商主義、古典派、古典派の転換、現代の経済学について講義し、教科書は入江奨『昭和59年度経済学史ノート』（自販）を使用した⁴⁾。

本年のゼミ1のテキストはゼミ生と相談の結果、古典派ではなくケインズの『一般理論』を使用した。なお、本年のゼミ大会への取り組みは不明である。

ゼミ2のテキストは、前年度に引き続き、リカードウの『経済学および課税の原理』を原書で読んでいる⁵⁾。

また、入江先生はゼミ連顧問を続けている。

9月20日に『松山商科大学六十年史（写真編）』が刊行された（編集委員長は望月清人）。この写真編には、写真の掲載だけでなく、元学長や名誉教授など15人が思い出を寄せている。その中で、入江先生は「学生の自主的研究活動の一齣」⁶⁾を執筆している。この論考は入江先生がゼミ連顧問として長年指導してきた学生の自主的研究活動の動向（1961年度から1983年度まで）を伝える出色のもので、入江先生ならではのものであった。

11月18日、1985年度の推薦入試が実施され、経済学部の推薦入学人員は約90名で、志願者が126名、合格者を108名発表した⁷⁾。

4) 『1984年教授要目』

5) 『1984年教授要目』

6) 『松山商科大学六十年史（写真編）』247～250頁。

7) 『学園報』第65号、1984年12月1日。

9月22日、大学院入試（修士課程，9月期）が行なわれた。経済学研究科は志願者はゼロであった⁸⁾

11月14日、稲生理事長・学長ら大学当局は、法学部を設置すべく、法学部設置委員会を設置した。委員長は山口卓志（教学担当理事）が就任した⁹⁾ 私は山口先生の隣の研究室（研究センターの1階）であったため、夕方、山口先生が研究室に来て、「懸案の法学部放っておくわけにいかないののでつくることにした」と語ったことを覚えている。

本年度も学生の自主的研究活動の発表の場である、第31回全日ゼミ（11月23～25日、立命館大学）、第24回中四ゼミ（11月10、11日、山口大学）が開催されている。入江ゼミの参加状況は不明であるが、清野ゼミが参加している¹⁰⁾

12月、『創立六十周年記念論文集』が刊行され、入江先生は「マルサス体系における真実労賃因子としての奢侈品論－『人口論，初版』の検討－」を執筆した。役職退任後の最初の論文であった。しかし、予定どおり研究が進まず、先生の一時的結論としては、マルサスの真実労賃因子としての奢侈品の位置づけは、『人口論』の初版からではなかった、というものであった¹¹⁾

1985（昭和60）年2月11日、田辺勝也経済学部長の任期満了に伴う学部長選挙が行なわれ、第10代経済学部長に新しく比嘉清松教授（48歳）が選出された¹²⁾

2月10～12日、1985年度の一般入試が行なわれ、9日が人文学部、10日が経済学部、11日が経営学部であった。経済学部の募集人員は350名（推薦を含む）であった。志願者は経済学部2,195名。合格発表は2月21日。経済学

8) 『学内報』第94号，1984年10月。

9) 『学内報』第96号，1984年12月1日。『学園報』第69号，1985年12月1日。

10) 松山大学経済学部清野ゼミナール「AD2001」。

11) 入江奨「マルサス体系における真実労賃因子としての奢侈品論－『人口論，初版』の検討－」『創立六十周年記念論文集』1984年12月。

12) 『学園報』第66号，1985年3月15日。

部は942名を発表した¹³⁾

3月20日、午前10時より体育館にて第34回卒業式が挙行され、経済学部は401名が卒業、経済学研究科修士課程は1名が修了した¹⁴⁾ 入江ゼミでは9名が卒業した。

3月22、23日、大学院入試が行なわれ、経済学研究科修士課程は3名の志願者があり、1名が合格した。博士課程はゼロであった¹⁵⁾

2) 1985 (昭和60) 年度

入江先生赴任35年目、61歳～62歳にかけての時期である。伊達功大学院経済学研究科長の下、運営委員を続けている。また、学校法人の評議員を続けている。

学長は稲生晴6年目で、最終年の年である。経済学部長は新しく比嘉清松が就任した(1985年4月1日～1989年3月31日)。経済学研究科長は伊達功が務めた¹⁾

4月1日、午前10時より本学体育館にて入学式が挙行され、経済学部は432名、経済学研究科修士課程は1名が入学した²⁾

本年の経済学部では専任の採用はなかった。

本年度の入江先生の担当科目は、前年と同様、経済原論I(4単位)、一般演習(2単位)、経済学史(4単位)、ゼミ1、2(各4単位)、短大の経済学I(2単位)。そして、大学院は経済学史で、博士課程の大学院生を指導している。

13) 『学内報』第90号、1985年6月1日、『学内報』第95号、1984年11月1日、『学内報』第98号、1985年2月1日、『学園報』第66号、1985年3月15日。

14) 『学内報』第100号、1985年4月1日。なお、1984年9月期の卒業生を加えると、経済学部405名、経営学部458名、人文英語82名、社会111名。

15) 『学内報』第100号、1985年4月1日、『学園報』67号、1985年4月1日。

1) 『学内報』第100号、1985年4月1日、『学内報』第101号、1985年5月1日。『六十年史(資料編)』126～131頁。

2) 『学内報』第101号、1985年5月1日。

経済原論Ⅰの講義内容は、前年とはほぼ同様で、教科書は入江奨『昭和60年度経済学講義』（自販）を使用した。

経済学史の講義は、前年とはほぼ同様であるが、経済学史の出発点としての時代の特徴、重商主義、重商主義の解体・自由主義経済論の台頭、資本主義と重農主義、古典派経済学生誕の準備促進時代、古典派経済学の形成、古典派経済学の発展、古典派経済学解体と経済学再編成の模索期、マルクス経済学の生成と発展、経済学の諸自然科学的展開、経済学の制度的展開、とかなり詳細になっている。教科書は入江奨『昭和60年度経済学史ノート』（自販）を使用した³⁾

本年のゼミ1のテキストはリカードウの『経済学および課税の原理』（原書）である。

ゼミ2のテキストはゼミ1の続きで、ケインズの『一般理論』を読んでいる⁴⁾

また、入江先生はゼミ連顧問を続けている。

5月、入江先生は桃山学院大学での経済学史学会関西部会で「マルサスにおける人口論と経済学」を発表している。それは吉田秀夫の『経済学説研究』（第百書房、1932年9月）への批判であった⁵⁾

9月21日、大学院の入試が行なわれ、経済学研究科修士課程は3名が受験し、2名が合格した⁶⁾

9月30日、稲生理事長ら大学当局は、1986（昭和61）年度から始まる18歳人口の急増期に応じるために、1986（昭和61）年度から1992（昭和67）年度までの期間を附した臨時定員増を文部省に申請した。それは次の通りである⁷⁾

3) 『1985年教授要目』

4) 『1985年教授要目』

5) 入江教授退職記念号の研究業績より。

6) 『学内報』第106号、1985年10月1日。『学園報』69号、1985年12月1日。

7) 『学内報』第106号、1985年10月1日。『学園報』69号、1985年12月1日。

経済学部	350 → 400 名
経営学部	350 → 400 名
人文英語	80 → 100 名
人文社会	100 → 120 名

また、10月30日、稲生理事長ら大学当局は、ついに本学に法学部を設置することを決定した。昨年11月に法学部設置委員会（委員長山口卓志教学担当理事）を設置して、10回に及ぶ会議をへて、9月26日の合同教授会、10月30、31日の理事会、評議員会で承認を得た。そして、1988年4月開設を目標に1986年7月末までに文部省に申請すべく準備に入った⁸⁾

本年末で稲生晴学長の2期6年の任期が満了するので、学長選考規程に基づき、11月5日、学長候補者推薦委員会（委員長渡部孝）を開き、そこで越智俊夫教授（経営学部、労働法担当）一人を推薦し、11月14日、越智教授に対する信任投票が行なわれ、越智教授（61歳）が当選した⁹⁾

11月17日、1986（昭和61）年度の推薦入試が行なわれ、経済学部の推薦入学人員は約90名、志願者は118名、合格者は106名であった¹⁰⁾

本年も学生の自主的研究活動の発表の場である、第32回全日ゼミ（11月29日～12月1日、中央大学）、第25回中四ゼミ（11月9、10日、松山大学）が開催されたが、入江ゼミの参加状況は不明である¹¹⁾

12月25日、文部省より臨時定員増の認可がおりた¹²⁾

12月31日をもって、稲生晴学長が2期6年の任期を終えて退任した。

1986（昭和61）年1月1日、越智俊夫が松山商科大学学長・理事長に就任

8) 『学内報』第108号、1985年12月1日。『学園報』第69号、1985年12月1日。

9) 『学内報』第107号、1985年10月1日。『学内報』第108号、1985年12月1日。『学園報』第69号、1985年12月1日。

10) 『学内報』第108号、1985年12月1日。『学園報』第69号、1985年12月1日。

11) 松山大学経済学部清野ゼミナール「AD2001」。

12) 『学内報』第109号、1986年1月1日。

した。

2月9日から11日にかけて、1986年度の一般入試が行なわれ、9日が経営学部、10日が経済学部、11日が人文学部であった。経済学部の募集人員は臨時定員増により400名(推薦を含む)。経済学部の志願者は2,911名であった。合格発表は2月21日。経済学部は1,023名を発表した¹³⁾

3月20日、午前10時より本学体育館にて第35回卒業式が挙行され、経済学部は426名が卒業、経済学研究科修士課程は2名が修了した¹⁴⁾ 入江ゼミでは7名が卒業した。

3月21、22日、大学院の入試(修士・博士課程)が行なわれ、経済学研究科修士課程は受験者2名で、合格者は1名であった。博士は1名が受験したが、合格しなかった¹⁵⁾

3) 1986(昭和61)年度

入江先生赴任36年目、62歳~63歳にかけての時期である。大学院の運営委員を続け、伊達功経済学研究科長を望月教授とともに補佐した。また、学校法人の評議員を続け、5月28日からは評議員会議長に就任している。

学長は、越智俊夫(1年目)、経済学部長は比嘉清松、経済学研究科長は伊達功が引き続き務めた¹⁾

本年度、新任教員として経済学部では入江重吉(哲学)が助教授として、波多野五三(英語)が講師として採用された。

4月1日、午前10時より本学体育館にて入学式が挙行され、経済学部は505名、経済学研究科修士課程2名が入学した²⁾

本年度の入江先生の担当科目は、前年と同様、経済原論I(4単位)、一般

13) 『学内報』第111号、1986年3月1日。『学内報』第112号、1986年4月1日。

14) 『学内報』第112号、1986年4月1日。

15) 『学内報』第112号、1986年4月1日。

1) 『学内報』第112号、1986年4月1日。『学内報』第113号、1986年5月1日。

2) 『学内報』第113号、1986年5月1日。

演習（2単位）、経済学史（4単位）、ゼミ1、2（各4単位）、短大の経済学I（2単位）。そして、大学院は経済学史で、博士課程の大学院生をを指導している。

経済原論Iの講義内容は、前年と同様で、本年の教科書は、入江先生自販のテキストではなく、金子ハルオの『経済学（上）』を使用している。

経済学史の講義は、前年と同様で、教科書は入江奨『昭和61年度経済学史ノート』（自販）を使用している³⁾

本年のゼミ1のテキストは、リカードウの『経済学および課税の原理』（リカード全集）を使用している。本年度のゼミ大会への参加状況は不明である。

ゼミ2も、ゼミ1からの続きで、リカードウの『経済学および課税の原理』を読んでいる⁴⁾

また、入江先生はゼミ連顧問を続けている。

5月28日、学校法人松山商科大学の評議員会が開かれ、入江先生が議長に選出された（1986年5月28日～1989年3月27日）。

7月30日、越智理事長・学長ら大学当局は文部省に法学部設置認可申請書（第1次申請、1988年4月開設、定員200名）を出した⁵⁾

9月27日、大学院経済学研究科修士課程の入試が行なわれ、4名が受験し2名が合格した⁶⁾

11月16日、1987年度の推薦入試が行なわれた。経済学部の推薦募集人員は約90名、志願者が126名、合格者121名であった⁷⁾

11月20日、任期満了に伴う学校法人の評議員選挙が行なわれ、入江先生は再選され、また評議員会議長を引き続き務めた⁸⁾

3) 『1986年教授要目』

4) 『1986年教授要目』

5) 『学内報』第116号、1986年8月1日。

6) 『学内報』第118号、1986年10月1日。

7) 『学内報』第120号、1986年12月1日。『学園報』第74号、1987年3月1日。

8) 『学内報』第120号、1986年12月1日。『学内報』第121号、1987年1月1日。『学園報』第73号、1987年2月1日。

本年も学生の自主的研究活動の発表の場である、第33回全日ゼミ（11月22、23日、南山大学）、第26回中四ゼミ（11月29、30日、香川大学）が開かれたが、入江ゼミの参加状況は不明である⁹⁾

1987年2月2日、文部省より「法学部設置認可申請書」について、若干の留意事項（コース制の特色、学科目編制と講義内容、履修方法等）が¹⁰⁾ついたが、第1次審査にパスした旨の通知を受けた¹⁰⁾

2月9～11日、1987年度の一般入試が行なわれ、9日が経営学部、10日が経済学部、11日が人文学部であった。経済学部の募集人員は400名（推薦を含む）、経済学部の志願者は2,943名、合格発表は2月21日で1,120名を発表した¹¹⁾

2月11日、比嘉経済学部長の任期満了に伴う学部長選挙が行なわれ、比嘉清松が再選された¹²⁾

3月20日、午前10時より本学体育館にて、第36回卒業式が挙行された。経済学部は389名、経済学研究科修士課程は2名が修了した¹³⁾。入江ゼミは7名が卒業した。

3月23、24日大学院経済学研究科の入試が行なわれ、修士課程は5名が受験し、2名が合格した。博士課程の志願者はいなかった¹⁴⁾

4) 1987 (昭和62) 年度

入江先生赴任37年目、63歳～64歳にかけての時期である。大学院の運営委員を続け、伊達功研究科長を望月教授とともに補佐した。また、学校法人の評議員会議長を続けている。

9) 松山大学経済学部清野ゼミナール「AD2001」。

10) 『学内報』第126号、1987年6月号。

11) 『学内報』第116号、1986年8月1日。『学園報』第72号、1986年9月1日。同第73号、1987年2月1日。同第74号、1987年3月1日。

12) 『学内報』第123号、1987年3月号。『学園報』第74号、1987年3月1日。

13) 『学内報』第124号、1987年4月1日。『学園報』第75号、1987年4月1日。

14) 『学内報』第124号、1987年4月。

学長は、越智俊夫が続け（2年目）、経済学部長は比嘉清松、経済学研究科長は伊達功が引き続き務めた¹⁾

4月1日、午前10時より愛媛県県民文化会館メインホールで入学式が挙行され（今年度から）、経済学部は495名、経済学研究科修士課程は4名が入学した。越智学長は式辞で法学部の増設を説明した²⁾

本年の経済学部では、新教員として、二神孝一（経済学）が講師として採用された³⁾

本年度から経済学部では新カリキュラムが始まった。第1は従来専門科目を、必修、選択必修、選択としていたのを分野別に7群の選択科目群（理論経済学、経済史、経済・社会政策論、産業論、国際経済論、財政・金融論、情報・統計論）に編成して、基礎、展開、応用と系統的な履修の徹底をはかることをめざした。第2は国際化、情報化の流れのなかで、国際経済、情報統計の各群を設置し、新科目も設置した。第3は地域経済の取り組みとして産業論の群を設定をした。そして、7つの群の中から2群を選択履修させつつ同時に7群の全般から広く履修できるようにした。第4に2年次配当の必修科目として基礎演習を新設した⁴⁾また、経済原論という科目名の名称を変更した。

本年度の入江先生の担当科目は、マルクス経済学入門（4単位、従来の経済原論Iの名称変更）、一般演習（2単位）、基礎演習（4単位）、経済学史（4単位）、ゼミ1、2（各4単位）、短大の経済学I（2単位）。そして大学院は経済学史で、博士課程の大学院生を指導している。

マルクス経済学入門の講義は、前年と同様で、教科書は金子ハルオの『経済学（上）』を使用した。

基礎演習のテキストは森岡孝二他編『入門現代の経済社会－日本と世界の明日はどのような』（昭和堂）を使用している。

1) 『学内報』第124号、1987年4月1日。

2) 『学内報』第125号、1987年5月1日。

3) 『学内報』第125号、1987年5月1日。

4) 『学内報』第124号、1987年4月1日。

経済学史の講義は、前年と同様で、教科書は入江奨『昭和61年度経済学史ノート』（自販）を使用した⁵⁾

また、ゼミ連顧問を続けている。

入江先生は4月、教科書「マルクス経済学入門」を出した。未見である。

本年のゼミ1のテキストはリカードウの『経済学および課税の原理』（リカードウ全集第1巻）であった。

ゼミ2のテキストは前年のゼミ1からの続きで、リカードウの『経済学および課税の原理』を読んでいる⁶⁾

4月、入江先生は『松山商大論集』第38巻第1号（1987年4月）に「マルサスの『人口原理』の論理について－『人口論』と経済学との関連（上）」を発表した⁷⁾この論文は、1966年4月に『経済学・歴史と理論－堀経夫博士古稀記念論文集』（未来社）に掲載した「マルサスの人口論について」の再論であり、また、1985年5月の経済学史学会関西部会で報告したものであった。

6月29日に、越智理事長・学長ら大学当局は法学部第2次修正申請を行った。それは教員組織やカリキュラム、設備計画などをまとめたものであった⁸⁾

9月26日、大学院の入試（修士、前期）が行なわれたが、受験生はいなかった⁹⁾

10月、第52回経済学史研究会（堀研究会の後身）が関西学院大学であり、入江先生は「マルサスの文芸協会での諸報告をめぐって」を報告している。

本年秋、本学に悲劇が起きた。法学部開設に尽力していた山口卓志理事は文部省に法学部設置申請後、体調を崩し、3カ月にわたり病魔（悪性リンパ腫）

5) 『1987年講義案内』

6) 『1987年講義案内』

7) 入江奨「マルサスの『人口原理』の論理について－『人口論』と経済学との関連（上）」『松山商大論集』第38巻第1号、1987年4月。

8) 『学内報』第127号、1987年7月号。

9) 『学内報』第130号、1987年10月号。

と闘っていたが、11月7日午後10時47分、松山市文京町の松山日赤病院にて逝去された。47歳の若さであった¹⁰⁾ 山口理事は体調異変に気づいていたが、多忙のため、病院に早くかかれず、病院に行ったときにはすでに遅かったという。深夜、経済学部の教員が連絡を受け、何名かが病院に駆けつけた。私はそのとき奥様から「山口は意識混濁の中、ベッドから起き上がり、何度も大学に行かなければ、大学に行かなければと叫び、皆が制止しようとしたが山口の力は強かった」との話を聞いた。

11月15日、1988年度の推薦入試が行なわれた。経済学部の推薦募集人員約90名、志願者129名、合格者123名であった¹¹⁾

本年も学生の自主的研究活動の発表の場である、第34回全日ゼミ（日時不明、富山大学）、第27回中四ゼミ（11月28、29日、徳山大学）が開催された。入江ゼミが参加したか不明である¹²⁾

12月18日、法学部の設置認可が文部省の審査会を通過し、12月23日に文部大臣より認可された¹³⁾

1988年2月9～12日にかけて、一般入試が行なわれ、9日が経営学部、10日が経済学部、11日が人文学部、そして12日が新設の法学部の試験であった。経済学部の募集人員は400名（推薦を含む）。志願者は経済学部2,962名であった。合格発表は2月20日。経済学部は1,087名を発表した¹⁴⁾

なお、この時、入試問題でミス、誤配があった。9日の経営学部の午前の国語試験問題で、問題一の設問(2)で解答欄がないというミスが発生し、さらに午後の経営学部の英語入試問題で、大阪会場で翌日の経済学部の英語の入試問題が配られるという誤配がおきた。誤配にすぐ気づいたが、後の祭り、急遽本部からファックスで経営の英語問題を送り、コピーして試験を乗り切った。そ

10) 『学内報』第132号、1987年12月号。

11) 『学内報』第132号、1987年12月号。『学園報』第78号、1988年4月1日。

12) 松山大学経済学部清野ゼミナール「AD2001」。

13) 『学内報』第133号、1988年1月号。『学園報』第77号、1988年3月15日。

14) 『学内報』第135号、1988年3月号。『学園報』第78号、1988年4月1日。

して、10日の経済学部の英語入試問題はもはや使用できず、予備問題で試験がなされた。この誤配問題はマスコミに報道され、マスコミが大学に押し寄せ、大騒動となった。

2月25日、任期満了に伴う経済学研究科長選挙が行なわれ、伊達功教授が再選された(1988年4月1日より2年間)¹⁵⁾

3月19日、第37回卒業式が挙行され、経済学部は426名が卒業、経済学研究科修士課程は2名が修了した¹⁶⁾。入江ゼミでは7名が卒業した。

3月16、17日、大学院の入試が行なわれ、経済学研究科修士課程は3名が受験し、2名が合格した。博士課程は1名が合格した¹⁷⁾

5) 1988 (昭和63) 年度

入江先生赴任38年目、64歳~65歳にかけての時期である。定年退職(65歳の年度)の年である。学校法人の評議員会議長を続けている。大学院の運営委員はおりた。

本年4月、懸案の法学部が開設され4学部体制となった。学長は、越智俊夫が続け(3年目)、経済学部長は比嘉清松、経済学研究科長は伊達功が引き続き続けた(なお、大学院の運営委員は高橋久弥と田辺勝也)¹⁾

4月1日、午前10時より愛媛県県民文化会館にて入学式が挙行され、経済学部は487名、大学院経済学研究科修士課程は2名、博士課程は1名が入学した²⁾

本年の経済学部には、法学部の新設に係わって(一般教育の教員増員)、多くの新教員が採用され、鈴木茂(財政学総論)、外崎光広(婦人論概説)、星島一夫(地域と福祉)が教授として、中嶋慎治(国際関係論)、藤井輝明(計量

15) 『学内報』第136号、1988年4月号。

16) 『学内報』第136号、1988年4月号。

17) 『学内報』第136号、1988年4月号。『学園報』第78号、1988年4月1日。

1) 『学内報』第136号、1988年4月号。

2) 『学内報』第137号、1988年5月号。

経済学、経済学)、村上扶美枝(英語)、カロリン・フンク(ドイツ語)が講師として採用された³⁾

本年度の入江先生の担当科目は、マルクス経済学入門(4単位)、一般演習(2単位)、基礎演習(4単位)、経済学史(4単位)、ゼミ1, 2(各4単位)、短大の経済学I(2単位)。大学院は経済学史で、博士課程の大学院生を指導している。

マルクス経済学入門の講義は、前年と同様で、教科書は金子ハルオ『経済学(上)』を使用した。

基礎演習の講義は前年と同様である。

経済学史の講義内容は、前年と同様で、教科書は入江奨『昭和61年度経済学史ノート』(自販)を使用した⁴⁾

今年のゼミ1のテキストはスミスの『国富論』(大河内一男監訳)を使用した。

ゼミ2のテキストはリカードの『経済学および課税の原理』ならびに入江奨『経済学史メモ』を使用した⁵⁾

また、ゼミ連顧問を続けている。

4月、入江先生は「マルサスの真実価値論と価値尺度論との関係についての覚書—スミスからマルサスへ—」を『久保芳和博士退職記念論文集 上ヶ原三十七年』(創元社、1988年4月)に発表している(1987年8月9日校了)⁶⁾。この論文は、これまで、入江先生は支配労働(価値)尺度説に関するスミスからマルサスへの継承に異議をはさんだことはなかったが、それを「早合点」と反省し、スミス、マルサスの原典に即し積極的に検討したもので、結論的には、マルサスはスミスの真実価格論を正確に理解せず、また、マルサスはスミスの

3) 『学内報』第136号、1988年4月号。

4) 『1988年講義案内』

5) 『1988年講義案内』

6) 入江奨「マルサスの真実価値論と価値尺度論との関係についての覚書—スミスからマルサスへ—」『久保芳和博士退職記念論文集 上ヶ原三十七年』創元社、1988年4月。

支配労働尺度説を支配労働力尺度説と誤読・誤認し、スミスからマルサスへの継承は不存在であるというものだった。

5月、経済学部は第1回経済学部学内ゼミナール大会を開催した。それまで、中断していた学内ゼミナール大会の復活であり、ゼミ活性化のためであった。3年生のゼミ生が4年生になって発表し、新3年生も参加した。入江ゼミも「リカードの価値論の研究」を発表した⁷⁾

6月、入江先生は『松山商大論集』第39巻第2号（山口卓志教授追悼記念号）に「王立学術協会におけるマルサスの2報告－翻訳とその研究－」を発表した（1988年7月8日校了）⁸⁾この論文は、王立学術協会での1825年5月4日と1827年11月7日の報告を入江先生が翻訳したものである。

また、同号に入江先生は「山口卓志君の学部学生時代」を投稿している。そこで入江先生は、米軍の焼夷弾が山口君の片肢を奪ったこと、進学校である福山の誠之館高校が彼の義足が体育実技の履修を不能にするという理由で拒否したこと、商業課程しかなかった盈進商業高等学校に進んだこと、高校時代昼夜わかたぬ程頑張り、睡眠時間は6時間をこえることはなかったこと、本学に入学してからは、一般の会社への就職は当初から断念し、税理士又は公認会計士をめざしていたこと、クラブ活動は新聞学会に入り、2年次には編集委員兼業務部長に就任し、3年次には編集長に就任したこと、成績は極めて優秀であったこと、ゼミは入江ゼミをえらんだが、それは入江先生が府中、山口さんが福山で地縁によるとのと推測されること、3年次の時、入江先生は山口君を自宅により、大学院への進学を勧め、フランス語の学習を勧めたこと、卒業論文は「日本経済における二重構造について－賃金格差を中心として－」であったこと、神戸大学大学院では経済学史の林治一教授のもとに入ったこと、博士課程に進んだ時、増岡学長の担当の財政学の担当者を増強する問題が浮かびあが

7) 松山大学経済学部のホームページより。

8) 入江奨「王立学術協会におけるマルサスの2報告－翻訳とその研究－」『松山商大論集』第39巻第2号（山口卓志教授追悼記念号）、1988年6月。

り、安井・岩田方式をとり、本学の卒業生で大学院に在学中の院生の中から選ぶことにし、在学中の成績が安井・岩田両君に匹敵し得るものということが主要な理由で山口君に白羽の矢がたったこと、そのためテーマの変更が必要であり、入江先生が林教授と相談し、テーマを財政学各論（地方財政論）としたこと、などを明らかにしている⁹⁾。いかに山口卓志が頑張り屋で且つ優秀であり、本学からどれほど期待されていたかが判明しよう。

9月24日、大学院入試（修士課程）が行なわれた。経済学研究科の受験者はいなかった¹⁰⁾。

9月28日、法学部ができたことにより、越智学長は学長の諮問機関として、新校名検討委員会（委員長望月清人）を発足させ、審議の結果、10月25日に答申が出た。それは、「松山商科大学の名称を『松山大学』とし、松山商科大学短期大学部を『松山短期大学』とするのが望ましい」というものであった。そして、その直後の合同教授会で審議決定し、11月2日の評議員会および理事会にて、来春より校名変更することが決定された¹¹⁾。

11月1日、学長選挙に投票できる者の会議（有権者会議）が開かれ、そこで、付帯決議として、「学長選考規程検討委員会」を理事長の諮問機関として組織し、1990（昭和65）年3月31日までに現行学長選考規程の検討を行なうこととすることが決議されている¹²⁾。その背景に、現行の推薦委員会方式、特に一人に絞ることへの不満があった。

11月18日、越智俊夫学長が体調不良により、日赤に入院した。

11月20日、1989年度の推薦入試が行なわれた。経済学部の募集人員は約90名、志願者は120名、合格者は112名であった¹³⁾。

9) 入江奨「山口卓志君の学部学生時代」『松山商大論集』第39巻第2号（山口卓志教授追悼記念号）。

10) 『学内報』第142号、1988年10月号。

11) 『学内報』第143号、1988年11月号。『学内報』第144号、1988年12月号。

12) 『学内報』第156号、1989年12月号。

13) 『学内報』第145号、1989年1月号。『学園報』第80号、1989年2月8日。

12月末の越智俊夫学長の任期満了に伴い、11月16日、学長候補者推薦委員会が開かれ、理事の神森智教授（経営学部教授）1人が推薦された。そして、11月24日に神森教授への信任投票が行なわれ、神森教授（61歳）が9代目の学長に選出された¹⁴⁾

12月16日、日赤に入院していた越智俊夫学長・理事長は、1ヶ月にわたる闘病生活の末、同日午後5時肺梗塞による呼吸不全のため逝去した。享年64歳であった。法学部開設に伴う2人目の犠牲者であった。

1989（昭和64）年1月1日、神森智教授が学長・理事長に就任した。

2月9～12日にかけて、1989（平成元）年度の一般入試が行なわれ、9日が経営学部、10日が経済学部、11日が人文学部、そして12日が法学部であった。経済学部の募集人員は400名（推薦を含む）。経済学部の志願者は3,380名であった。合格発表は2月21日。経済学部は1,049名を発表した¹⁵⁾

2月13日、比嘉清松経済学部長の任期満了に伴う経済学部長選挙が行なわれ、新しく村上克美教授（50歳）が選出された¹⁶⁾

3月17、18日、大学院経済学研究科の入試が行なわれ、修士課程は3名が受験して1名が合格した¹⁷⁾

3月19日、午前10時より第38回卒業式が愛媛県民文化会館にて挙行され、経済学部404名が卒業、大学院経済学研究科修士課程は4名が修了した¹⁸⁾ 入江ゼミでは9名が卒業した。

入江先生は、1989年3月、久保芳和・真実一男・入江奨編『スミス、リカアドウ、マルサス—その全体像理解のために—』（創元社）を出版し、そこで「1824年のマルサス経済学」を執筆した。この論文は、1824年1月号のマルサ

14) 『学内報』第144号、1988年12月号。『学園報』第80号、1989年2月8日。『温山会報』第31号、1988年12月。

15) 『学内報』第147号、1989年3月号。『学内報』第148号、1989年4月号。『学園報』第80号、1989年2月8日。

16) 『学内報』第147号、1989年3月号。

17) 『学内報』第148号、1989年4月号。

18) 『学内報』第148号、1989年4月号。

ス「四季評論」によるマカロック批判をとおして、マルサスの経済学の特質を論じたものであった。

3月27日、入江先生は長年にわたる学校法人の評議員を定年によりおりられた（1966年4月～1989年3月27日）。また、評議員会議長もおりられた（議長は1986年5月28日～1989年3月27日）。

3月31日、入江先生は定年退職（65歳）した（4月1日から再雇用）。

（以下、次号）